

福井県（福井城跡）の様相

河村 健史（福井県立歴史博物館）

福井県下で調査された17～18世紀の遺跡のうち、調査件数が多く、資料の豊富な福井城跡を以て福井（越前）の例として以下述べる。

1. 福井城跡の画期

福井城跡および北庄城跡について、次のように時期区分している。15世紀～1574年を朝倉期北庄期。1575～1600年北庄城期だが1583年柴田勝家落城し、画期と成り得るが現状区分不可能のため織豊期を一括する。1601年～19世紀後半福井城期（1624北庄→福居と名称変更される。）1606年福井城完成。1669年天守をはじめ大半を焼く寛文の大火。1686年貞享の大火、石高を半分にされたため、藩士の大量解雇されることにより屋敷の割り当てが大きく変わる。

以下、各画期毎の出土遺物の様相を見てゆく。

2. 福井城創建前後（1601年頃）

・北陸新幹線福井駅部地点（位置図53A） 遺構53032 武家屋敷のゴミ廃棄土坑である。遺物は瀬戸美濃および胎土目絵唐津が中心である。土師質皿や瀬戸美濃灰釉青磁写し碗等に古い要素（16世紀後半）を見ることができる反面、絵唐津や大窯志野等が多く含まれ、新しい要素（17世紀初頭）がみえる。また軟質施釉陶器も出土する。越前焼播鉢では口縁下沈線の凹みが浅く、17世紀初期の様相を呈する。以上、絵唐津および志野を含むが、織部は含まない遺物様相から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

3. 寛文大火（1669年）以前

・福井城西口地下駐車場地点（位置図54A） 遺構4-401 本丸に近く、城代等重臣の屋敷地であった。主な遺物は伊万里、中国染付、唐津唐津、瀬戸美濃、越前、土師質皿である。17世紀前半としては伊万里・中国を含め磁器の比率が高く、対して唐津が少ないことが特色である。伊万里では外面鉄釉碗や蘭絵小坏、見込に砂目の残る軟質胎土の染付皿などがみられる。中国染付は呉須手大皿、景德鎮系では碗類・小坏や壺、向付が出土し、他の遺跡と比べ数量とともに器種の豊富さが特色である。唐津では胎土目と共に砂目の両方がみられる。瀬戸美濃は非常に少ない。食器類の中心は肥前系に移ったことを感じさせる。福井城下絵図によると慶長18年の絵図に記された住人と、次に古い万治2年以前作成絵図の住人が変わっており、この住人入れ替わり時（17世紀前～半ば）の遺物群と考える。

4. 寛文大火（1669年）以降

・国際交流会館地点（位置図55） 遺構82・230 調査区は200石クラスの中級武家屋敷である。遺物の様相は、瀬戸系が減少し、伊万里が増加する。また、唐津では京焼風や量産形呉器手碗、飴釉碗等が多量に出土する。特に呉器手碗は量的にも多く、福井城下では身分の上下を問わず出土し、また村落遺跡でも普遍的に出土する。これに対し京焼風陶器は量的に少なく、特に皿が少ない。この他珍しいものでは京焼色絵テッセン紋碗がみられる。伊万里でも色絵碗が2つ出土している。中国染付は上級武士では皿・大皿・碗・瓶他多彩であるが、中級武家ではほとんど小坏のみでみられる。

5. 福井城下への搬入経路

肥前陶磁、京信楽系製品等は、他の北陸の消費地の出土状況から船（日本海）→三国港→足羽川→福井城で入ってきたと考えられる。一方、少量ながら定量出土する瀬戸美濃は、足羽川ルートその他、美濃街道経由の可能性も考えられる。



福井城跡関連調査地点位置図 (S=1/10,000)



53. 北陸新幹線福井駅部地点 遺構53032出土遺物 (S=1/5)



54. 駅西口地下駐車場地点 遺構 4 - 401 出土遺物 (S=1 / 5)



55. 国際交流会館地点 遺構82 出土遺物 (S=1 / 5)